

平成21年度病害虫防除技術情報第5号

平成21年12月1日
大分県農林水産研究センター
安全農業研究所

冬春期における野菜の病害防除対策について

近年、冬～春期に温暖多雨傾向が続き、果菜類の灰色かび病や白ねぎのべと病などの病害が多く発生しています。これらの病害は、現在の発生はなくても急激に進展しやすく、多発生後の防除は極めて困難であるため、発生前からの予防を心がけましょう。

1 過去2年間の発生状況

(1) 平成19年度

果菜類では、12月下旬以降の多雨条件下において灰色かび病が急激に進展し、12月以降平年を大きく上回って推移しました（平成20年2月1日付平成19年度病害虫発生予察注意報第7号）。また、白ねぎのべと病も1月以降急激に増加しました。

(2) 平成20年度

1～3月の高温多雨条件下でトマト灰色かび病（平成21年2月1日付平成20年度病害虫発生予察注意報第5号）、が1月以降、白ねぎのべと病（平成21年3月1日付平成20年度病害虫発生予察注意報第6号）が12月以降に多発生しました。

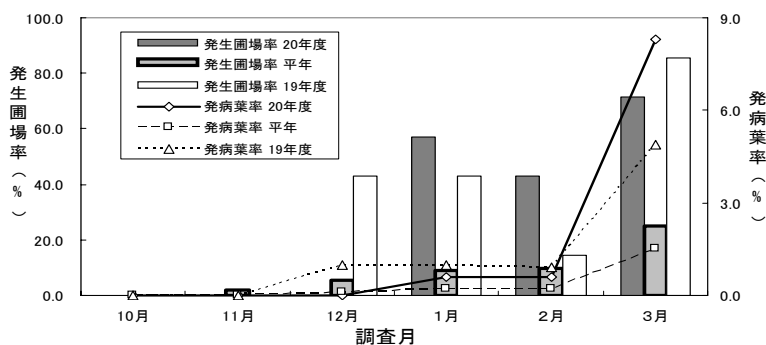


図1 トマト（冬春）灰色かび病の発生推移

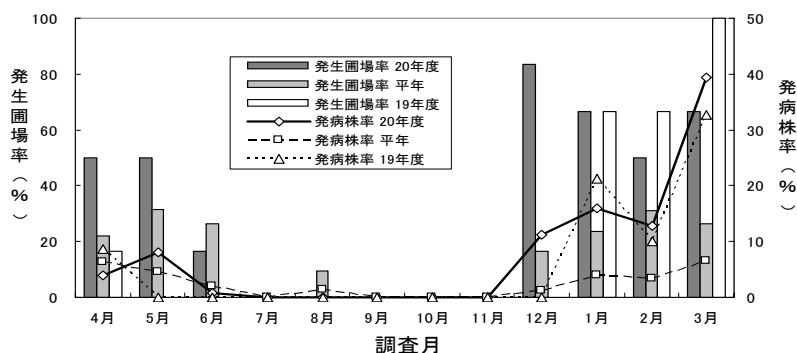


図2 白ねぎ（平坦地）のべと病の発生推移

2 本年の発生状況及び要因

- (1) 果菜類の灰色かび病は 11 月中旬の巡回調査において、トマト、イチゴでの発生は認められませんでした。キュウリでは平年より多い発生を認めました。

キュウリ

発生圃場率 : 20.0% (平年 : 0%、前年 : 0%)

平均発病葉率 : 0.4% (平年 : 0%、前年 : 0%)

- (2) 白ネギのべと病は 11 月中旬の巡回調査においては発生を認めませんでした。
- (3) 両病害とも近年発生が多いため、残渣等の第一次伝染源が多く存在していると考えられます。また、20℃程度の温度と多湿条件下で発病が助長されますが、福岡管区気象台の3か月予報によれば、12月～2月にかけては気温が高く、降水量が平年並と予想されており両病害の拡大が懸念されます。

2. 防除対策

- (1) 果菜類の灰色かび病、白ねぎのべと病ともに 12 月以降急激に進展しやすいので、12 月初旬の予防が重要です。また、両病害とも冬春期を通じて発生するので、定期的な防除が必要です。
- (2) 発病果や発病葉は伝染源となるので、見つけ次第ハウス外に持ち出し、土中に深く埋める等適切に処分しましょう。
- (3) 施設栽培ではできる限り換気を図るとともに、暖房機の送風を行う、攪拌扇を作動させるなど、通風に努め、ハウス内の過湿防止に留意しましょう。
- (4) 防除は晴天日の日中に行うことが望ましいですが、施設栽培で曇雨天時に防除しなければならない場合は、くん煙剤等を使用すると過湿防止に有効です。
- (5) ボトキラー水和剤のダクト内投入を行っている場合では、加温機の設定温度を高めにし、発病を認めた場合は速やかに治療効果のある薬剤を散布しましょう。
- (6) 薬剤耐性が発達しやすいので同一系統薬剤を連続使用しないようにし、系統の異なる薬剤とのローテーション使用を行いましょう。
- (7) 薬剤の使用に当たっては「大分県主要農作物病害虫及び雑草防除指導指針」を参照するとともに散布前には必ずラベルで確認し、農薬使用基準（収穫前日数、使用回数等）を遵守する。

(ホームページアドレス <http://www.jppn.ne.jp/oita/shishin/index.html>)